

一凜

月刊

書道教室 薬院 一凜
sho-do ICHIRIN

繼續は力なり



No.16

2019年3月



夢は美一歩一歩
希望は高まがよ
夢も希望も捨てなければ
必ず近づいてくる
刻まがよ



月刊一凜 No.16 <2019年3月>

《競書審査員》佐々木峯雲 《発行》書道教室 一凜 薬院 《小作品査定員・制作》野口昌芳(NS)



書道教室 薬院 一凜
sho-do ICHIRIN

〒810-0022 福岡市中央区薬院3-7-25 原ビル2F
TEL / 092-791-7251 FAX / 092-791-7786
<http://www.shodo-ichirin.com/>

墨を擦る

文 = 岡田 雄希

やるべきことは、
あまたある

監督)を擁した東海大相模の活躍が活躍した当時を思い出してほしい。あの頃から知られるようになつたが、東海大系列の付属高校野球部は縦じまのユニホームでほぼ統一されていた。「ほぼ」と書いたのは関西の東海大附属高校の中には縦じまでないユニホームのチームがあった。ベテラン記者から「関西は日本高野連のお膝元だから、阪神タイガースのような”華美な”縦じまのユニホームは自肅しているらしいぞ」と付度があることを教わつたことがある。縱じまが華美なんて、ねえ。

加えて、甲子園大会期間中となると主催する新聞社の販売戦略が強化される。注目選手には、プロ野球チームのスカウトたちが監督や選手の保護者にも接触して高額な契約金交渉が水面下で行われていることも業界では常識だ。そんな現象に高野連のお歴々は眉をひそめるだけだ。ゆえに、今回の騒動をきっかけにして、やるべき改革は何なのかと気づいてほしい。投手の球数制限導入や過酷な開催日程の見直しなどなど。やるべきことは、あまこある。

岡田 雄希 Yuki Okada

昭和33年3月20日、北九州市生まれ。平成23年12月に一凛に入門。
趣味は自転車と酒を飲むこと。酒は誘われたら断らないがモットー。

Jリーグ初代チエアマンとして知られる川淵三郎氏が、日本高野連に随分ご立腹らしい。発端は高知県の高知商業の野球部員が甲子園で応援してくれたチアリーダーへの返礼にダンスコンテストにゲスト参加したことを高野連がとがめたからだ。コンテスト義を排すのが好きだ。同時に女子マネージャーをグラウンドに危険だから立たせるなーなど古いしきたりを守り続けることも信条としているようだ。あたかも原理主義を貫く歴史ある宗教組織のようでもある。では、高野連と大手新聞社が主催する春夏の

外野自由席500円まで。入場料は、審判への日当、グラウンドや観覧席の整備など多額の開催費用に費やされるそうだ。

加えて、甲子園大会期間中となると主催する新聞社の販売戦略が強化される。注目選手には、プロ野球チケットのスカウトたちが監督や選手の保護者にも接触して高額な契約金交渉が水面下で行われていることも業界では常識だ。そんな現象に高野連のお歷々は眉をひそめるだけだ。ゆえに、今回の騒動をきっかけにして、やるべき改革は何なのかと気づいてほしい。

投手の球数制限導入や過酷な開催日程の見直しなどなど。やるべきこと

広島県の福山市立大成館中学の校長をされていた友道健氏先生に、高校生になった教え子が送つてきただメールから。

照)を覚えているかな?

1に0・01を足すと1・01、引くと0・99。わずかの違いだけれども、それを1年365日繰り返すとどうなるか。二つの数字を365乗すると、1・01は最終的に37・8になり、0・99では0・03まで小さくなる。

生徒からはこんな返事が返ってきたそうです。
平成31年1月18日 西日本新聞朝刊 佐藤弘のよか話を聞いたとですよ
何をするにしても、一凜の基本理念である「継続は力なり」ということに尽きるでしょう。

佐々木峯雲

皆から置いていかれるって一人で焦る。先生だって、そんな気持ちになることがあるんだから、案外、君のよくな悩みは皆持っているんじやないか、と考えたらどうだろう？ もう少しゆっくり周りが見られるんじやないか。

実は自分を変えるって、そんなに難しいことではなによ。それよりも本当に難しいのは、変えようとすること努力を続けることの方なんだ。

「何かひとつをがむしゃらに続けて行きます。なん
無理して変えようとするから、続かずに変われない。わざ
かなことを毎日やり続けること。それが大事なんだよ。
の姿は大きくとも、実際の差は小さなことの積み重ね
なんだ。

わふく
かのじ
おひのこ
のこ

The image shows two vertical columns of Chinese calligraphy. The left column contains the characters '則' (Zé) at the top and '法' (Fǎ) at the bottom, both written in a bold, black, cursive-like font. The right column contains the characters '禮' (Lǐ) at the top and '義' (Yì) at the bottom, also in a bold, black, cursive-like font.

書体／篆書体

$$0.99 \text{の法則} \rightarrow 0.99^{365} = 0.03$$

小倉百人一首に親しむ

第3回

秋の夜長の憂いを、山鳥の尾で表現

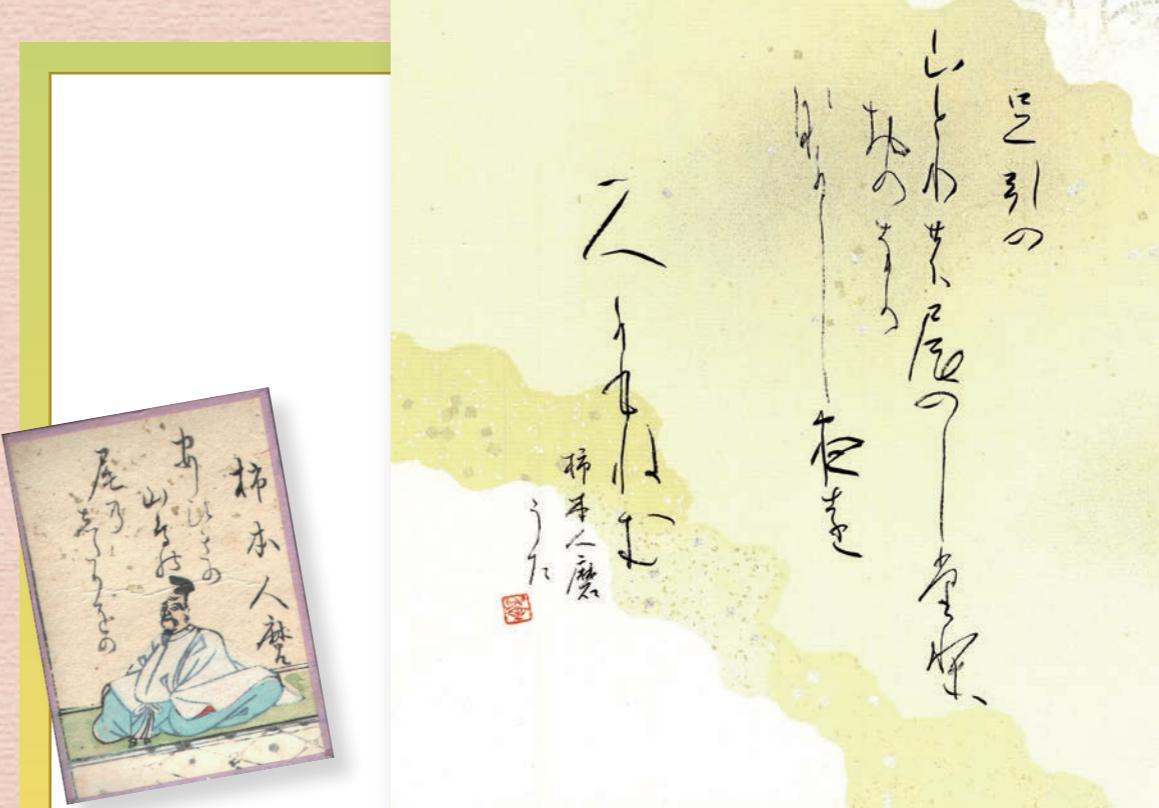
歌番号3

あしひさの
山鳥の尾のしだり尾の
ながながし夜を
ひとりかも寝む

この記事は角川書店発行「田辺聖子の小倉百人一首」より引用・編集したものです。
表現豊かな田辺聖子さんの文章で、小倉百人一首を楽しみましょう。

【作者】
柿本人麿

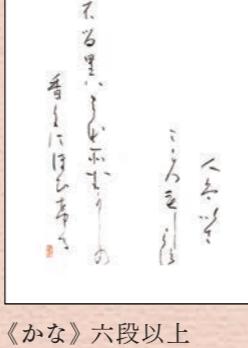
【現代語訳】
山鳥の長く垂れ下がっている
尾のように
長い長い夜を
愛するひとと
離ればなれになつて、
ひとり寂しく
寝るのだろうなあ。



3月分 課題

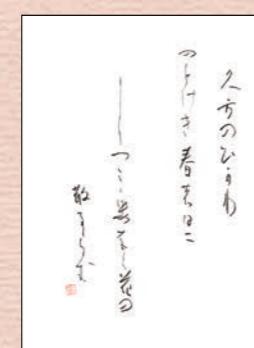
夜長観書喜

《漢字 楷書》
六段以上



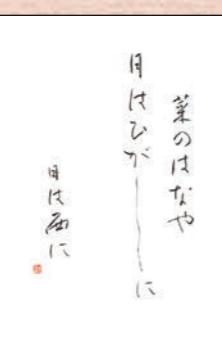
古今妙言無

《漢字 楷書》
初段～五段



富安平

《漢字 楷書》
10級～1級



配布された手本に間違えがないか、左記課題一覧を必ず確認してください。

今月の言葉

1月の漢字課題は、皆さんと一緒に苦労されていた
ようです。

一級までの方の楷書課題は特に「樂」が画数の多い旧字体の「樂」でした。大きくならないように調整するのに苦労していました。穂先のコントロールや筆圧の調整の練習になったと思います。

五段までの方の隸書課題は、隸書の運筆に慣れていません上に、縦四文字で長い横線に苦戦していました。起筆(逆筆)がこれから課題です。今回は殊の外難しい課題だったので、多くの方より「難しそう」とお叱りを頂戴いたしました。「ご不満は御尤も。なぜならば、仕上がった手本を見て、「これは難しい。これは六段以上の課題にしてもいいのかな」と感じたのは事実です。猛省しております。

篆書は、穂先を丸め込んで蛇の頭のように書き(藏峰)が難しかったようです。篆書は、実際書くことで、その難しさと絵を描いているような楽しさを実感したと思います。

今月の漢字課題は有段者も楷書です。初心に戻つて頑張ってください。

1月の初段以上の方の課題は小作品でした。

今回で第三回目ですから、少しずつ要領を掴んできているようです。素晴らしい作品ばかりで、審査は大変でした。四ヵ月後の第四回目が楽しみです。

3月分課題は4月10日(水)が提出期限予定です。

諦めることなく、コツコツと努力することが何より大切です。
みなさん、今月も頑張りましょう。

ものの扱い方も作法の一つとやれてきました。例えば漆の器、代、家庭の女性たちが伝えました。多少は色褪せても、またそれなりに風格景色がアリ。続けられてきた家系の歴史を物語る。

木かげにおじいさんやおばあさんが集まって来ました。子どもたちも来ました。お弁当を広げる人もいます。フレディたちは、葉っぱをそよがせて涼しい風を送つてあげました。

木かげにおじいさんやおばあさんが集まって来ました。子どもたちも来ました。お弁当を広げる人もいます。フレディたちは、葉っぱをそよがせて涼しい風を送つてあげました。

《硬筆》
10級～1級

《硬筆》
初段以上

《かな》
10級～1級

《かな》初段～五段
久方の光のだけき
春の日に静心なく
花の散るらむ

《かな》六段以上
人はいさ 心も知らず
ふるさとは 花ぞ昔の
香にほひける

「山鳥」の歌をよむと「ほのぼのと」は海難よけの歌だから、「山鳥」は山の神への挨拶のつもりで、昔の人は、この歌を人丸作としたのであります。ともあれ、「山鳥」の歌、あるまいが、などと考えたりしてしまいます。

丸はんは、この明石で「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島が暮れゆく船をしづく」という歌を詠みはつた、ということになつていて、明石は海の難所である所から、水難よけの神サンでもあります。

柿本人麿は、私たち学校で習うところによれば、持統、文武朝(七世紀末から八世紀初頭)において、皇族鑽仰の歌や挽歌の秀作を「万葉集」に多く残した、白鳳時代の宮廷歌人です。

しかし庶民にとってはそんな難しいことは知らない、人丸はん(字もやさしくなる)は身近な神サン

尊びます。ほかの歌人はそう呼ばれません。赤部赤人も、大伴家持も歌聖とは言われませんが、すでにインテリたちも、人丸を歌聖と尊びます。ほかの歌人はそう呼ばれます。赤部赤人も、大伴家持も歌聖とは言われませんが、すでに「古今集」序に、紀貫之は「柿本人麿なむ歌の聖なりける」と書いています。

「古今集」序に、紀貫之は「柿本人麿なむ歌の聖なりける」と書いています。

愛誦=詩文を好んで、常に口ずさんだり、歌つたりすること。